

日本心理学会第**88**回大会公募シンポジウム

『宗教指導者(僧侶, 牧師, 司祭)が
宗教心理学を行う意義について考える
—実証的宗教心理学の挑戦(3)—』
プロテスタントをめぐる状況をふまえて

発表者 河村従彦

2024年9月8日

神学と心理学(経歴)

1 牧師・臨床心理士

意識してきたこと

プロテスタントの教職(牧師)・神学者の専門性

臨床心理士としての社会的認知

関心・研究領域

宗教と臨床心理学双方にまたがる領域から見えてくる人間理解

神イメージ理論(God Image Theory)研究を中心に

神学と心理学(経歴)

2 宗教指導者として

プロテスタントの牧師 (対信徒)

説教(聖書の説き明かし)の手法と内容の根本的な検討

人間理解の深化の模索

人材育成 牧師職養成

講座担当

責任者/院長9年 (対志願者)

臨床的視点を入れた講座を人材育成プログラムに導入

神学と心理学(経歴)

(現在)

私設心理相談室運営 KCPSカワムラカウンセリングルーム

<https://counseling.kcps.jp/>

YouTube講話発信 恵みフォーラムチャンネル

<https://www.youtube.com/c/megumiforum>

児童発達支援

大学・神学校の非常勤講師、他

神学と心理学(経歴)

3 実証的臨床心理学を目指した実存的な意味

(1)臨床現場での戸惑い 一ドラッグのクライエント

(2)宗教は自分を救えたのかとの問題意識

→宗教実践を問い合わせ直し

より健全で、スピリチュアルニーズに応え得る宗教のあり方

人間科学、実証的心理学の臨床的側面は有効

→人間の内界を宗教用語に収斂させてしまわずに、

親和性のある臨床心理学で表現してみる

I 問題意識：プロテstant教界を視野に

1 既存の宗教は、人間が本来持つスピリチュアルなニーズに応えることができたのか

プロテstant神学 救済のパターンを提示 「救い」「聖化」
このパターンの妥当性は実証的には未検討

2 既存の宗教は、健全な人間形成に寄与したのか

思考停止、現実直視が苦手、パーソナリティ形成

I 問題意識：プロテstant教界を視野に

3 プロテstantが主張する人格変貌にプロテstant神学は応え
ることができたか

宗教をやっているのに性格が悪い人、なぜ？

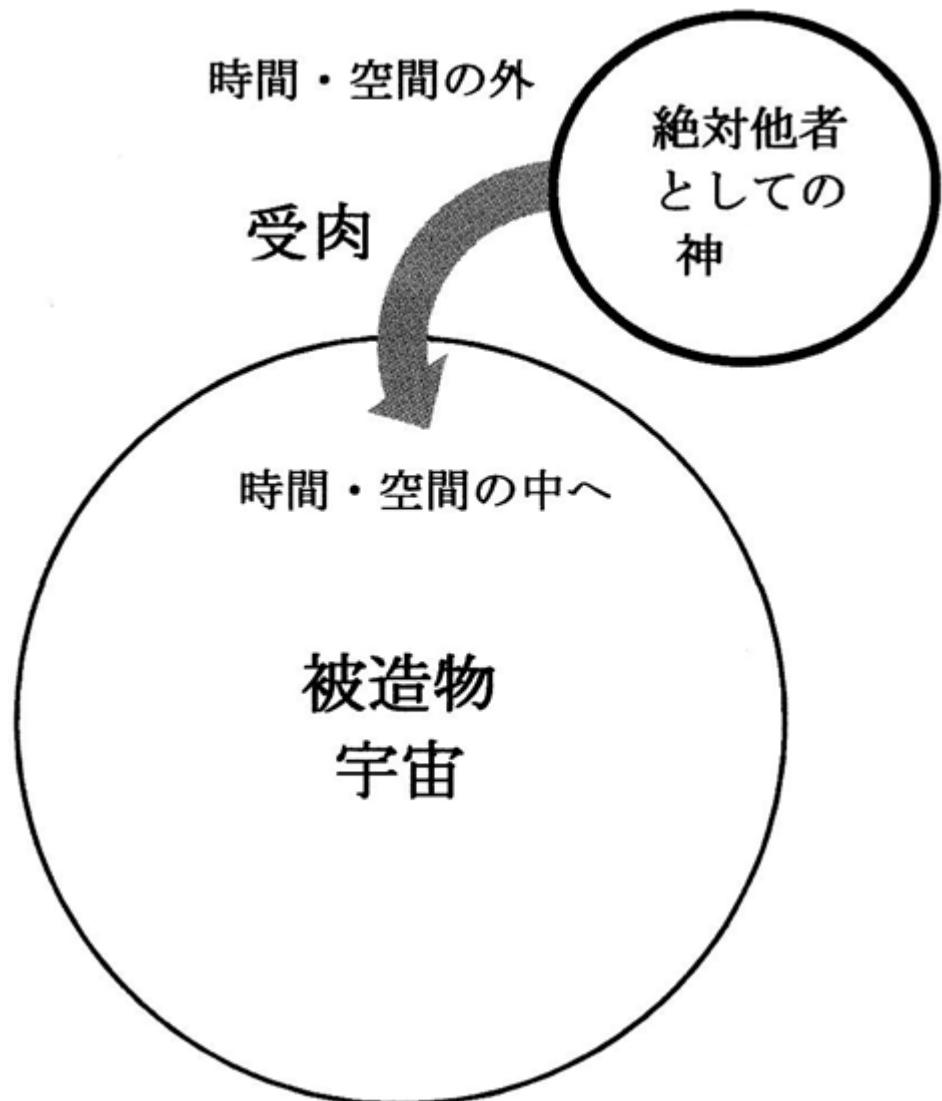
このような現象のベースに人間理解の不足？

宗教（イエスの神の国） —スピリチュアルなニーズに応える
プロテstant神学 —人間が変わることを強調 「聖化」

Q キリスト教をやればかたぎになる、聖くなる？

A ある程度観察できる現象でありながら、背伸びをした神学
→モラリズムとの戦いを招いた

《参考》プロテスタントの宗教性



- 1 一神教絶対他者神
人格性 意志 計画
- 2 人間と関わりを持つ
→イエス
受容 共生
人間の救済と **変容**

I 問題意識：プロテスタント教界を視野に

- 4 宗教は親子問題等、現代的課題に有効な解決を提示できたか
子育て論 聖書は宗教書、具体的には論じていない
原則は提示している

- 5 宗教の周辺で発生した問題について内部自浄能力はあるか
キリスト教界に存在し続けたハラスメント問題
組織化による世俗性

II 問題意識：プロテスタント宗教者をめぐって

1 宗教者が宗教者としての人間形成ができたのか

「指導者」であることの問題 —イエス 指導ではなく「仕える」
牧師養成部署への異動のときに信徒から出た要望

1 人間を知っている牧師

2 ずうずうしくない牧師

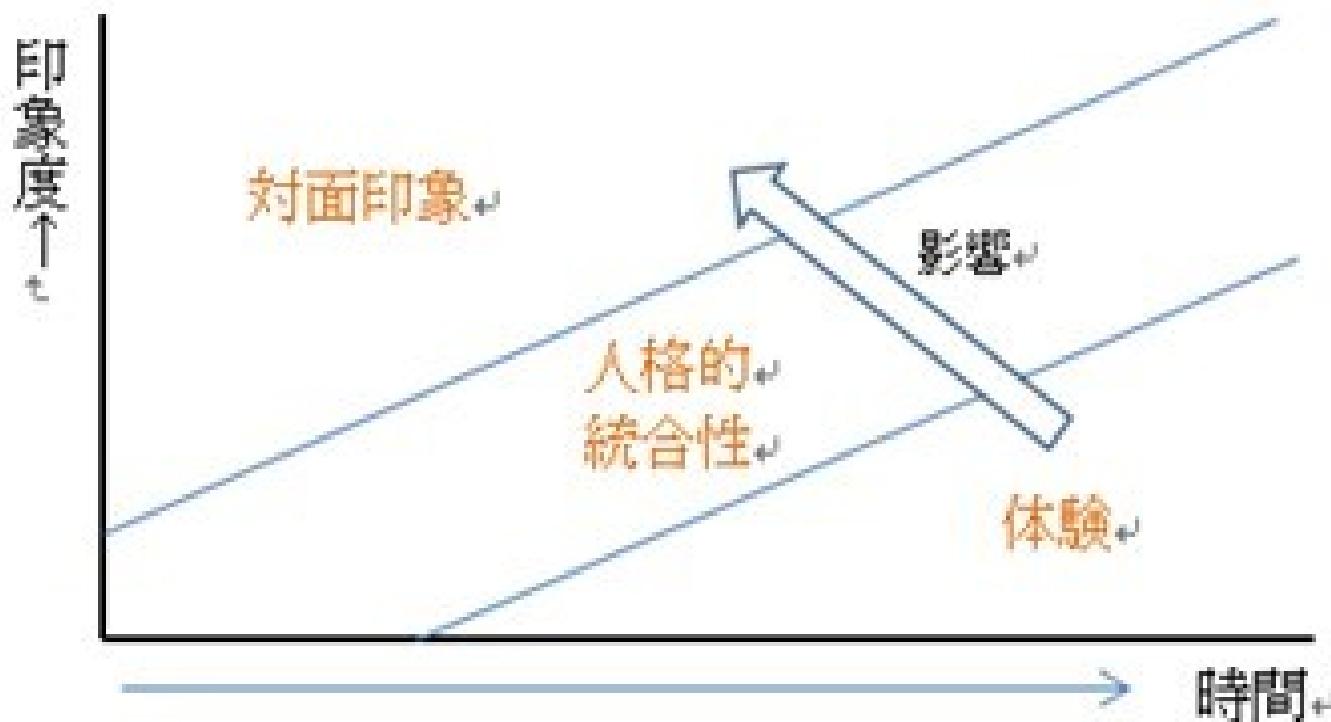
3 市井の牧師

宗教 知的合意ではなくスピリチュアルな絶対性 →自己完結

自己認識が進まないまま宗教活動 →信徒からの疑義

II 問題意識：プロテスタント宗教者をめぐって

対面印象 ~ 人格的統合性 ~ 体験
良好
生来のキャラ
経験としての明確さ
自分を譲れる自由度



II 問題意識：プロテスタント宗教者をめぐって

宗教の絶対性

過度な確信と権威主義

宗教ハラスメント、宗教者による虐待につながった可能性

権威主義 一人格の尊厳が重視されなかつた

ハラスメント被害 —イエスは人の尊厳を重視

2 宗教者としての人格的統合はどのようなものだったか

プロテストするために運動→個人的宗教者のカリスマ中心

個人的宗教性と共有できる宗教性（公同教会論）

→論争と排他性 →過度な二項対立と排他性・攻撃性

II 問題意識：プロテスタント宗教者をめぐって

3 宗教者は世襲か個人的実存によるものか※

宗教環境で人格形成をして宗教者（牧師）になったケース

実存的プロセスを経ることが複雑になる

自立のプロセスの解明

※実存 人間的実存。独自な存在者として自己の存在に关心をもちつつ存在する人間の主体的なあり方

▼マーシャ理論の早期完了

II 問題意識： プロテスタント宗教者を めぐって

アイデンティティ・ステータス	危機	傾倒	概略
アイデンティティ達成 (identity achievement)	経験した	している	幼児期からのあり方について確信がなくなり、いくつかの可能性について本気で考えた末、自分自身の解決に達して、それに基づいて行動している。
モラトリアム (moratorium)	その最中	しようとしている	いくつかの選択肢について迷っているところで、その不確かさを克服しようとして懸命努力している。
早期完了 (foreclosure)	経験していない	している	自分の目標と親の目標の間に不協和がない。どんな体験も、幼児期以来の信念を補強するだけになっている。硬さ（融通のきかなし）が特徴的である。
アイデンティティ拡散 (identity diffision)	経験していない	していない	危機前 (pre-crisis) : 今まで本当に何者かであった経験がないので、何者かである自分を想像することが不可能である。
	経験した	していない	危機後 (post-crisis) : すべてのことが可能だし、可能なままにしておかなければならぬという意識を持つ。

表1 マーシア (1966) のアイデンティティ・ステータス
(無藤 (1979) を一部改作)

Ⅲ 検討の可能性を考える

1 神学の内容を再検討する

基本教典である聖書の読み直し

イエスの神の国の現代的ボキャブラリーによる再表現

2 他宗派から学ぶ

カトリック、聖公会、仏教や神道など伝統宗教

3 人間科学としての実証的心理学研究を援用する

人間理解を深めることを目指して

IV 宗教と心理学 ー健全な宗教のあり方を模索して

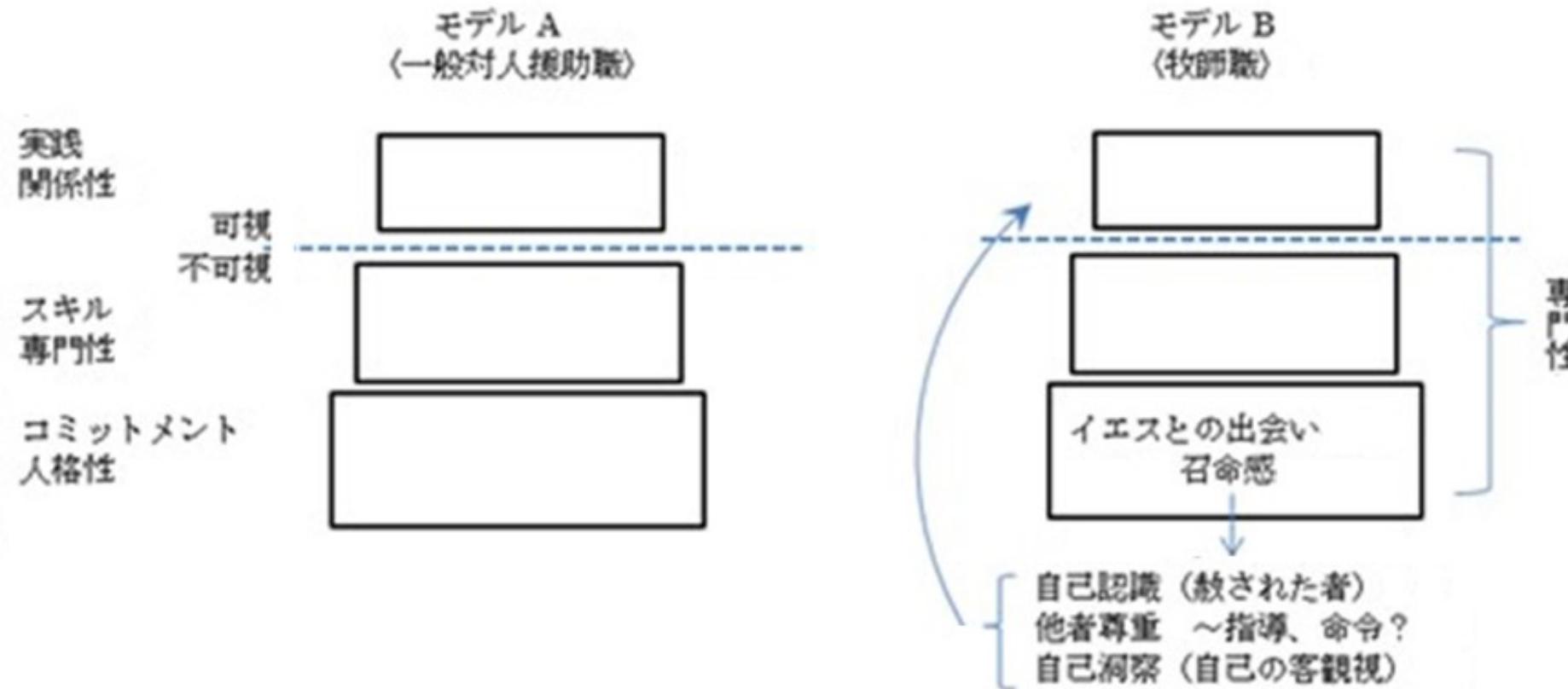
- 1 宗教を求める人を救うツールとして心理学を用いるのではない
- 2 キリスト教と心理学の融合を目指しているのではない
- 3 宗教の反省がベースにあるため、神学という土俵で論じる議論は受け入れられにくい → 人間の内界を宗教用語に収斂させてしまわずに、親和性のある臨床心理学で表現してみたらどうか
- 4 心理学は、現代的課題、特に人間理解にヒントを与える
- 5 心理学は、自己理解を促すことができる
- 6 心理学を援用することで宗教を思考停止にしてしまわない

▽ 宗教の枠の中で 実証的心理学研究が期待されるトピック

- 1 発達における自立のプロセス
 - 宗教が発達や自立を妨げてきた反省
 - 宗教の中核に人格の尊厳の重要性を設置し直す
- 2 負の傾向を持つ内界の要素分解 一内面化される神イメージ
 - 人間の感情機能の再評価 一恥、罪責感、自己存在の恥
- 3 宗教者的人格的統合
 - 信徒に受け入れられる宗教者の方(イエスの神の国)

▽ 宗教の枠の中で 実証的心理学研究が期待されるトピック

例 牧師の人格構造の要素分解



▽ 宗教の枠の中で 実証的心理学研究が期待されるトピック

4 宗教がもたらす発達性トラウマと複雑性PTSD

トラウマ研究 宗教指導者が原因となった虐待事例

宗教環境で人格形成したケース、過剰適応したケース

→宗教2世 教会2世

《参考》 カウンセリングルームの臨床から見えるテーマ

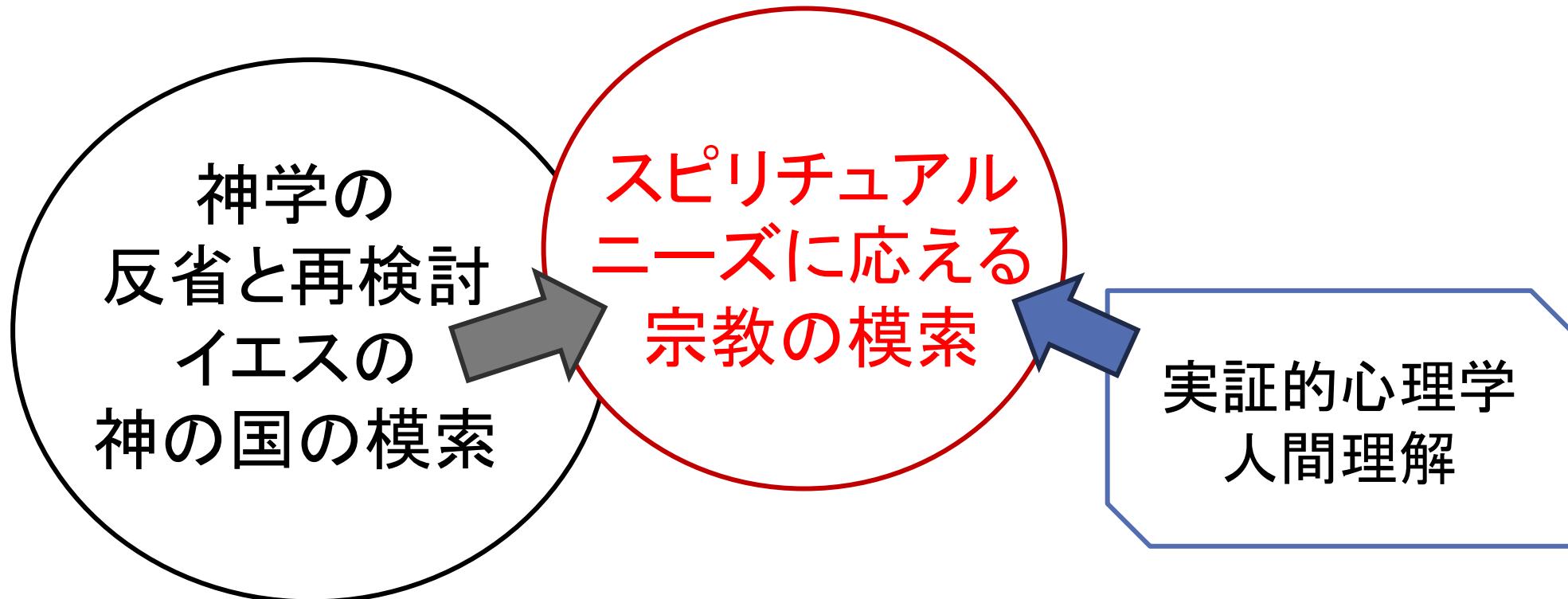
宗教環境で人格形成をしたクライエントの親子関係

宗教体系・組織がもたらした心の傷

しめくくりに

教界という枠 人間理解を前提とした宗教の健全さとバランス回復

宗教指導者という枠 本課題を体験的に理解する人材の育成



学術研究の可能性

土壤の培養 一接点を探って

前提 伝統宗教は先発 心理学は後発

現状 心理学は指摘する側 宗教(プロテstant)は防衛する側

共通点と相違点 人間を対象にしているが、

伝統宗教 スピリチュアルなニーズ 実存 ある種の絶対性

宗教学の蓄積はあったものの

人間存在は実証的研究対象にしにくい 「信仰をいじるな」

心理学 人間の精神・感情の機能を中心に実証研究

研究手法に載ることで妥当性 新しい学説に対して相対性

宗教(プロテstant)サイドの隙間 「人間変容」を強調 →対話の可能性

実証的心理学の可能性

計量分析 全体の傾向を明らかにする

質的分析 個々の文脈の実態と方略提示

ご静聴ありがとうございました。



Kawamura@kcps.jp